

認定NPO法人 わだつみのこえ記念館

記念館だより

Museum Watatsuminokoe Newsletter

No. 15
2021.5.31

大学における学徒出陣研究の到達点

館長 山辺 昌彦

学徒出陣やそれに関連する事項についての研究は各大学の百年史などの年史編纂や単独の共同研究により、進展し多くの成果を生み出している。学徒出陣研究で明かになったことをここで概観してみたい。学徒出陣とは狭義では一九四三年の在学徴集延期制度停止により、大学本科の学生や高等学校・大学予科・専門学校などの生徒が軍隊に入営、入団したことをさす。広義では一九四四・四五年度の在学中の学生・生徒の入隊や在学年限の短縮や徴集延期の最高年齢の引下げによる入隊も含めている。さらに大学によっては在学生の入隊すべてを指している所もある。

広義の学徒出陣の前段階

徴集延期の最高年齢の引下げは一九三九年からはじまり、一般学生は最高年齢が二五歳になり。一九四一年には二四歳に引下げられた。在学年限の短縮は一九四一年度から始まり、三か月短縮され、一九四二年度からは六か月短縮された。これらによって入隊した学生数はよくわからない。

狭義の学徒出陣

在学徴集延期の全面停止は一九四三年一〇月二日公布の「在学徴集延期臨時特例」により実施された。これらは軍の下級幹部の不足を学生で補い、学生の能力を軍事的に利用するためのものであった。在学徴集延期の全面停止は学徒全体を対象とするものであり、臨時徴兵検査を受けた。しかし、理科系・医科などの学徒は国家的に緊要な学校・学科に在学する者として、入営を延期された。そのため事実上、文科系のみが軍隊に徴集された。大学などは「徴集者名簿」の作成を義務付けられており、残っている大学も多く、この時期の徴集者数は比較的わかつていて、最髙学年は一九四三年一月に仮卒業し、一九四四年九月に卒業した。

出陣学徒壮行会

出陣学徒の壮行会は一九四三年一〇月二日に開かれた明治神宮外苑競技場での関東地方の学徒を集めた中央のものだけでなく、各地域、大学でも開催された。壮行会が開催されたのはこの時期だけである。



撮影/斎藤 尚義

朝鮮人・台湾人の特別志願兵

朝鮮人・台湾人はこの時期はまだ兵役制度が実施されていないため「昭和十八年度陸軍特別志願兵臨時採用規則」を制定し、特別志願兵として、軍隊にとつた。自発的でなく、強制的に志願させたが、それでも志願しない学生は大学から除籍・除名された。いくつかの大学では、志願者数や除籍・除名数がわかつていて、

戦争末期の学徒出陣

戦争末期には、一九四三年一二月の「徴兵適齢臨時特例」により、徴兵適齢が一九歳に引下げられた。一九四五年二月に「修学継続の為の入営延期等に関する件」の改正により、入営延期すべき学校の範囲が狭められ、理工系の大学予科・専門学校・高等学校や師範学校の生徒には入営延期が認められなくなった。これらにより根こそぎ動員となった学校も多い。

戦没学生の追悼と平和

出陣学徒を含む戦没学生の名簿作成、慰霊祭・追悼式・平和祈念式の開催、慰霊碑・平和祈念碑の建立などが、大学ごとに行われている。東大では戦没学生の名簿を作成し

入館案内

開館日 月・水・金
(祝日・夏季・冬季休館あり)
時間 午後一時～四時
*団体の場合は別途考えますので曜日・時間等ご相談ください。
入館料 無料
*エレベーターもあります。
*資料閲覧・映像の視聴は事前にご連絡ください。
*アクセス 地下鉄丸の内線・大江戸線「本郷三丁目」下車七分

ているが、平和祈念碑を建てていないし、関係者にも学内に建てさせていない。京都大学でも戦没学生の名簿を作成しているが、平和祈念碑を建てていない。早稲田大学・立教大学・東洋大学などでは戦没学生の名簿を作成し、平和祈念碑を建て、その前で平和祈念式を開催している。また、学徒出陣関係の展示会も大学などで開催されている。戦没出陣学徒の遺稿や遺品はわだつみのこえ記念館だけではなく、大学史編纂機関・大学史料館・大学文書館などでも所蔵している。立命館大学国際平和ミュージアムでは他大生の遺稿や遺品も収集している。大学文書館・大学史料館などには学徒出陣関係の公文書も移管されている。

大学院特別研究員

学徒出陣が行われる中で、若手研究者の確保育成のために、大学院特別研究員制度が一九四三年九月の文部省令「大学院又は研究科の特別研究生に関する件」により、設置された。一期二年と二期三年で、学資として月九〇円支給し、入学金・授業料を免除し、兵役も免除するものだった。当初の計画では、東京・京都・東北・北海道・九州・大阪・名古屋

の七帝国大学と東京商科・東京工業・東京文理の官立大学のみ置くものとされたが、慶応・早稲田がその働きかけにより入ることになった。一九四三年の第一回は文科系も募集したが、文理ともにいずれも戦争遂行のために軍の必要とする軍事研究を担う研究者の確保・養成であり、研究教育機関の内実をもったものにならなかった。一九四四年の第二回は文科系が外され、医も軍医不足のために減らされた。

大学の整理・統合

文部省は学徒出陣で学生が減る中、大学などの整理と統廃合を進め、極端までの理工系中心に再編成した。商業から産業・経営への変更、工業専門学校の設置、文科系大学の統合・専門学校化と定員削減などが行われた。特に立教大学の文学部と上智大学の商学部は廃止され、学生は慶応大学に委託された。また、明治学院高等部と高等商業部は青山学院文学部・高等商業部と関東学院高等商業部を統合し、明治学院専門部となった。

大学の校舎供出

学徒出陣で学生が減った大学などの校舎を、軍の要請や文部省の斡旋により、軍や軍需会社に貸すことが実施された。東京商科大学・大阪市立商科大学・慶応義塾大学・明治大学などが校舎を供出している。

以上、学徒出陣や関連する事項についての研究成果を概観したが、大学ごとの具体的成果や制度の詳細については別稿「学徒出陣研究の到達点と資料の所在」(『立命館大学国際平和ミュージアム資料研究報告』第五号所収)を参照されたい。

『祈りの碑』 「きけわだつみのこえ」

～会津の学徒兵 長谷川信の生涯～

長島 雄一

本書は福島県会津若松出身の学徒兵で、昭和20年4月に与那国島北方上空において23歳で戦死した長谷川信の生涯を描いたものである。また『きけわだつみのこえ』に一部のみ収録されていた軍隊時代の『日記』を、わだつみのこえ記念館収蔵の謄写版原稿によってほぼ復元し、同時に書かれた『修養録』、御遺族・訓練地などに残されていた資料を用いて彼の実像に迫っている。

長谷川信は私の母校、福島県立喜多方高等学校(当時の喜多方中学校)の先輩である。私は『きけわだつみのこえ』の彼の遺稿を読んで感銘を受け、足跡を追って全国を訪ね歩いた。精査の過程で私は「人類よ、猿の親類よ」というインパクトある表現で締めくくった彼の『日記』全文を読んでみたい、そして彼がいかなる人物であったかを知りたいと切に思った。それがこの本を書いた動機である。

信の生涯

長谷川信は大正12年4月12日、若松市の菓子商の家に生れた。昭和10年、名門会津中学校に入学。端艇部に所属し、学業成績も優秀であった。しかし訳あって4学年途中で休学。復学して、同15年、同志社大学予科へ進むが程なく帰郷。翌年、喜多方中学校5年に編入学した。そして1年後、明治学院の厚生科に進む。同



18年、徴兵猶予停止となって学徒出陣となり陸軍に入隊、飛行学校館林教育隊に特別操縦見習士官(Ⅱ期)として配属される。この時、同じ隊にいた同期が上原良司である。その後、信は満州に渡り訓練。昭和20年2月、特攻隊に選ばれ「武揚隊」に配属される。その後、松本で機体改修のため約40日間待機。この間、信らは東京から疎開してきていた児童と交流しており、その記録が最近明らかになった。(注)最後の帰郷後、祖国を離れる直前に宮崎から両親に『日記』等を送付。4月12日、杭州から台湾に移動中、与那国島北方上空で米軍機の大群に撃墜され戦死している。戦後、両親や恩師等によって昭和23年、猪苗代湖畔に追悼碑が建てられ、菩提寺である西蓮寺には平成14年に「兵戈無用」碑が造立された。兵は兵隊、戈は武器を表すもので「大無量寿経」より採られている。文字通り平和を願う強いメッセージである。



台座には『日記』の一節が刻まれている

『日記』・『修養録』

『日記』は信が軍隊内で秘かに書いた個人的記録である。一方『修養録』は軍に提出し検閲された報告日記である。『日記』には戦争の悲惨さ、軍隊への反発、宗教(キリスト教・浄土真宗)への傾倒、望郷の念などが記されている。『修養録』には訓練の様子や「戦陣訓」などが書かれるが、信は「隊長殿ノ訓話、感銘ナシ」など軍・上官への批判を記して提出しており「モット肝ヲ作レ」などの指導を受けている。

軍隊・戦争について信は、「単純ナル『軍隊現象』ノ日々ニ、修養ノ糧ヲ何処ニ見出サントスルカ」(『修養録』)、「こんな処で、何が深刻なる反省であり、何が修養であるか」(『日記』)、「懐疑 今の何も知らない子供達 彼等はあれでいゝ、みじめなのは俺達だ 俺達より丁度一昔前の、佑兄の頃の人達 俺達よりはまじだ人間らしい生活を、少しでも送ってきてるんだもの。」(『日記』)などと記している。

これとは対照的に「屍ヲ越エテ進マン哉」(『修養録』)、失敗した時には「此処ニテ、碎ケテハナルマジ。会津武士ノ名ニ背イテハナルマジ」(『修養録』)、「生への執着を捨てよ。」

望郷の憶を去れ」(『日記』)、「要は任務の遂行にあると俺は堅く信じる。黙々と任務に邁進する、どんなにそれが地味な任務であらうとも」(『日記』)、「無事に?明けて二十四才の年を迎う今年こそ晴の最後を飾る年」(『日記』)とも書いている。こうした記述には軍隊の中で自律・精励し、自分を鼓舞して進もうとする誠実さが見える。

宗教(キリスト教・浄土真宗)の記述が多いのも特徴である。「今ノ俺ニハ、聖書ト歎異抄ガアル。自分ハ、隙ヲ見付ケ次第、ムサボルヤウニ読ンデキタ」(『修養録』)、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて念仏申さんと思ひ立ツ心」(『日記』)、「歎異抄(第一条)、「神との交りのみが俺を慰め励ましてくれる。」(『日記』)、「唯一絶対の道わ念仏のみ」(『日記』)、「信仰さへありや、何ともないこつちや」(『日記』)、「俺の心は空虚に、又ヒカラびて行くのは眼に見えて明かだ。それでそれを止むべくもない。傍観するばかりだ。あとは只仏にするほかない」(『日記』)、「そして『修諸功德モ、従ツテ、植諸徳本モ、仏果ヘハ連続シナイ』(『修養録』)とは浄土真宗の核心を突いた端的な表現である。信仰に根差した強さを彼は最後まで持っていた。

また信は故郷、父母、愛した女性Fのことも青年らしく綴っている。「昨夜カラ降り初メタ雪ハ、周囲ヲ白一色ニ塗りソメ、雪ノ多カッタ故郷会津ヲ思ヒ出ス」(『修養録』)、「父母、兄弟ヨリノ書簡、焼ク。断腸ノ思ヒナリ」(『修養録』)、「母より封書来る。

葉書や封書は一切とつておけないことになつてゐるが、俺はどうしても俺の死ぬ時迄、持つて置かう」(『日記』)、「懐郷の想ひ切なり」(『日記』)、「猪苗代湖、戸ノ口の静かな夕方、薄く霞のかかった、鏡面のような湖、あの寂かな喜びを、Fと分かちあいたかった。併し、それも空しい願い」(『日記』)。

長谷川信が教えるもの

『日記』『修養録』を通読し、彼の人生を振り返ると、宗教を拠り所とした反戦・反軍の意思を強く持ちつつ、現実に煩悶しながらも前向きに生きる彼の誠実さ、純粋さを読み取ることが出来る。軍隊を批判しつつ訓練に励む。戦争に反対しながらも戦場に向かう。二書には不整合な記述が連続するが、こうした混交こそ迷いながらも前進した等身大の青年一人間・長谷川信のありのままの姿なのであろう。復元した『日記』『修養録』によって今まで知られてこなかった軍隊における彼の心の動きを克明にたどることができた。そして彼の記録は、武器だけでなく人間性の剥奪もまた戦争が持つ本當の怖さであることを教えている。信を含めた若き兵士たちの無念さと平和の大切さを改めてよく噛みしめたいと思ふ。

(注) きむらけん『改訂新版』鉛筆部隊と特攻隊(えにし書房 2019)ほか



常設展をみて

私は現25歳ですが、展示されている方々の当時の年齢も同じ年頃だと思うと、いろいろ感情が複雑になります。彼らの純粋に生きたい想いと、愛する人や国のために命を捧げるといふはざま、苦心していたと思います。その時代、時代によって、人々が頭を悩ます社会課題、個人問題は異なると思いますが、この見学を通じて歴史を学ぶ重要性を再認識しました。

(20.6.26 大田区 25歳)



ずっと来たいと思っていました。中学生の時に『きけわだつみのこえ』を読んで以来、このことを忘れてはならない、次世代に伝える責務があると思いつけています。特に、佐々木八郎さんの手記は何度も何度も繰り返して読んでいたので、今日実際に手記を見て、私と歳の変わらない青年が確かに生きていて、そして自分の死と徹底的に向かい合って亡くなったのだということを感じました。自分が死ぬことが最早決まってしまったような、十死零生の状況で、青年たちがどんな思いで言葉を綴ったのだろう。それを考える度に、どうにかこのこと、こうして死んでいった若者のことを、自分でも伝えられないだろうか。何か自分にできることはないだろうかと考えさせられます。今日はありがとうございます。また来ます。

(20.7.15 女性)



若くして戦争で散った若者の手記を読むと、とても感慨深いものがありました。彼らの死を無駄にしてはいけない。これからは戦争のない世の中になることを望みます。

(20.7.31)



戦後75年を迎え、当時を知る人の生の声を聞くことも難しくなってきました。「戦争反対の意志」の声は上がっても、世界情勢は不安定で、反戦・世界平和の旗振り役となるはずの日本がその声とは逆行しているように思えます。戦争資料や遺品の散逸も耳にするようになりました。時間の経過という深刻な問題にどう対処していたら良いかと考え、本日足を運ばせていただきましたが、やはり実際に自分の目で物を見、聞き、考えるに勝るものはないと思いました。自分と同じ出身の先人たちの苦悩を忘れず、次世代に語り継いでいくこと、それが今の自分にできることの一つではないかと考えました。

(20.8.14 女性)



ここ数年、戦争の記憶を継承していかなくてはならないという意識が高まってきました。身内でも祖母や祖父らが亡くなっていき、実際に戦争を体験した世代が天寿を全うしていく中、平和を希求するにあたって私たちにできることはないか、という焦燥感ともいふべき感情が自分の中に湧き

来館者の「感想ノート」より

起こっていました。

本日、念願叶って来館することができました。若くして戦地に散っていった方々の無念さ、悲しみ、やるせなさ 様々な感情があったことだろうと感じ、胸のつぶれる思いがしました。なぜ前途ある若者が無残にも生を終えなくてはならなかったのだろうか。日本という国は一体何を目指していたのだろうか。軍国主義一色だったこの日本に対し、怒りを覚えました。

亡くなった方と恐らく同世代だとは思いますが、私には戦死した大叔父がいます。祖母の弟ですが、祖母は自分が亡くなるまで自室の仏壇に弟の写真をずっと飾っていました。亡くなった方は、生きている者の心の中で生き続けますが、もし戦死しなければ、私も大叔父に会えていたと思います。生きて、人生を生きることができたはずで

終戦記念日の前日に、こちらに足を運ぶことができ良かったと思います。戦後75年、まだ日本は平和を完全には手中にしています。亡くなった方々の魂に誓える日が来るよう、戦争なき世の中の実現を目指していきたい。そんな思いを改めて新たにしました。

記念館の運営、本当にありがとうございます。(20.8.14)



手記を読ませて頂きました。皆さん、すばらしい才能の方ばかりで、これらの人々を安易に戦争へ駆り立てた、一部指導者の無能が招いた戦争は、あまりにも悲惨すぎます。これらの人々が今生きていたら、少しは精神的には、ましな日本になっていたように思われるが、残念でならない。足元には再び迫って来ていることを、ひとりひとり忘れてはならない。



近くに住んでいるため、この記念館のことは以前から存じておりましたが、なかなか機会に恵まれず、今日やっと伺うことができました。戦没学生の方々のことは色々眼の前になると、彼らを知るといよりも、彼らに没入する、自らと重ねて考えるという境地に達さずにはいられませんでした。

これだけセンチメンタルな学生たちが、葛藤したり、一抹の疑問を抱きながらも、戦争に命を投じていった、いかざるを得なかったという現実にはあまりに重いものです。

僕の友人や、僕自身が散っていったような錯覚に陥るほど他人事とは思われませんでした。

かれらには戦争や平和、命といった概念を考え抜き、悩み抜き心や力がありました。時間がそれを許さなかったのだと感じ

ました。幸い僕にはそれを許された時間があります。

彼らの手向けになるような生を営んでゆければと思います。

また来ます。

P.S. このような展示を維持・発展させてくださっている皆様は心から敬意と感謝の念を抱きます。ご苦勞も絶えないとは思いますが、皆様どうぞ御自愛ください。

(20.8.31 文京区 23歳 男性 学生)



前々から通りかかる度、気になってはいましたが、今回初めて見学させていただきました。戦争に翻弄されて散っていった若人の瑞々しい感性と、残した想いにふれて感動しました。振り返って自分の最近のコロナを恐れて無気力になっている己を反省しています。

(70歳 主婦)



開館日が平日であり、会社を休んで伺いました。こんな最近の話にも関わらず、既に風化しているのではと、恐れています。本来は、あるべき教育がなされず、このわだつみの声に耳を傾ける事さえ、なくなっていると思います。この貴重な場を多くの方に知ってもらい、そして多くの方が学びきっかけになればと思います。私は多くの人にこの展示を紹介したいと思います。展示に関わっている皆様、誠にありがとうございます。これも宜しく願いいたします。

(20.11.1 群馬県 43歳 会社員)



日本の近現代史に関する資料収集の一貫として伺わせて頂きました。教授からこの記念館の訪問を勧められる以前から、近辺に住んでいることもあり、存在は知っていましたが、都合が中々つかず、この度ようやく来ることができました。日本ニュース177号の学徒出陣式典の映像から伝わる、戦況が悪化する中、戦いに赴かなければならぬ、学徒兵の思いを、より強く感じました。地元の地名や同郷の方を目にしては、80年近く昔の大先輩方と、我々が、共に日本で、青春を過ごしながらも、その内容の苛烈さに、尊敬の念が絶えません。これからもこのような貴重な展示を続けて頂きますよう、どうかお願いいたします。

(20.11.13 文京区 21歳 学生)



初めて来ました。『きけわだつみのこえ』は、学生時代に読んだはずですが、ここに来て、肉筆を見て悲しい気持ちになりました。読みなおそうと思います。貴重な資料の保存は大変だと思いますが、いつまでも残していただきたく存じます。



前途ある優秀な青年たちが、このように命を落とされたことは痛恨の極みです。愛する人、自分の親兄弟のために尊い命を犠牲にして戦ってくれた方々に感謝と敬意が大切です。

(20.11.27)

平和ミュージアムめぐり

戦場体験史料館・電子版

山之内 裕明

高校生の夏。わたしはとあるイベントに参加した。そのイベントは、戦場を体験した祖父母世代より上の方とお話をする茶話会。

当時参加した理由は、流行りのゲームなどの影響で話を聞きたかった程度のものであった。普段ほとんど行く機会のない浅草公会堂。そこに待っていたのは、現代ではおおよそ体験しないであろう、壮絶な体験の数々だった。爆撃の被害に遭い、必死に逃げ回った当時の心境や、銃声の鳴り響く戦場での戦闘経験などの生々しいもの。

戦争体験とはどうしても悲惨なことが取り糺されるものだ。しかし、それだけではなく仲の良かった友人や世話になった人の話といった、日常の楽しみや面白話まで、様々なことを聞くことができた。こうした身近な話題も含めたものが、当時を生きた彼らにとつての日常であり、確かに存在していた記憶でもある。

私はイベントが終わる頃には、もつと話を聞き、記憶したいと考えるまでになっていた。

では、聞くためには何が良いのかと探したところ、イベントを主催していた団体が運営するインターネットサイトである「戦場体験史料館」(http://www.jvvap.jp/)を見つけた。史料館と言っても建物があるわけではないが、このサイトには、個人の記憶の証言が年代別、戦地別に紹介されており、多くの「記憶」が

敗戦を迎える場所、敗戦後なども違う。

また、私自身もこの二人以外の武蔵の搭乗員の体験を聞き取りに行つたことがある。準備が出来次第、掲載予定である。

近い場所、同じ空間、同じ時間にしたとしても、戦争体験は一人として同じものはない。だからこそ、一人ひとりの証言を残し、当時の「記憶」を現代に留める破片が必要になる。

薄れゆく「記憶」は一つの事象としてまとめられ、中身は分からなくなつていくものだ。そうした薄れる「記憶」を留める役割を果たすのが、この「戦争体験史料館」なのである。

もし、どこかで聞いた戦争体験があれば、それと同じ場にいた違う人の証言も覗いてみてほしい。おそらく、似ているようで全く異なる体験の多くを見ることとなるだろう。そこには、体験を話してくれた本人たちが生きた時代の破片があるはずだ。



「ネットワーク」短信

◆文京ミュージズネット

文京区内にある博物館・美術館・庭園など三五施設(当館も加盟)の合同イベント「文京ミュージズフェスタ2021」が昨年(2020年)11月15日(木)〜20日まで、ギャラリースピック(文京シビックセンター一階)にて開催されました。当館は戦没学生九名(板尾興市、上原良司、宇田川達、篠崎二郎、白井成徳、関口清、田村正、原亮、松岡欣平)の遺稿(画像)・遺影・履歴をA2のパネルに収めた八枚を出展しました。来場者は八一四名。

◆「文京ミュージズネットマップ」(日本語、英語)、「平和マップ」(文京区にある平和関連施設の紹介)は当館または文京区アカデミー推進課文化事業係で入手できます。

◆平和のための博物館・市民ネットワーク

全国交流会は第10回国際平和博物館会議に合わせて九月一九日にオンライン会議で開催されました。

短信

◆調査・研究への協力

・山崎エマ監督「ウィール・オブ・フレイト」『無法松の一生』をめぐる数奇な運命』(11/4 東京国際映画祭上映)

・「KAMIKAZE」(ARDDドイツ)レビニ(2000年)上映会(於:ドイツ)マスメディアへ協力

・「わだつみ会 不戦誓い70年、戦没学生の声を後世に」(共同通信8/5)

・「戦争の記憶継承 資料館、遺跡をどう残す」(読売新聞(8/15))。

・東京土建一般労働組合機関紙「けんせつ」八月二〇日号

◆来館者

*昨年度は緊急事態宣言により四月(五月、二〇二一年一月)〜三月二日まで休館のため来館者は一七七人でした。

◆ご寄付

記念館の維持・発展のために会費(維持、賛助)やご寄付をお寄せくださった皆さま、また来館の折にカンパしてくださった皆さまに深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

当館の管理・運営を担う「法人」理事は、設立以来無報酬で諸経費の節約に努めておりますが、維持・運営・集会・印刷等々に多額の費用が必要で、どうか今年度もご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

◆役員・スタッフ紹介

法人理事長・渡辺總子、副理事長・岡田裕之、記念館館長・山辺昌彦、常務理事・岡安茂祐、奥田豊己、基快久。ふだんの記念館運営は、山辺昌彦、奥田豊己、基快久、深澤かよ子、渡辺總子があたっています。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。

認定NPO法人 わだつみのこえ記念館

記念館だより 第15号

発行日 2021年5月31日

発行 行 わだつみのこえ記念館

東京都文京区本郷5-29-13

TEL: 03-3815-8571 赤門アピタシオン1階

TEL: 03-3815-8571

E-mail: info@watatsuminokoe.org

URL: http://www.watatsuminokoe.org

URL: https://www.watatsuminokoe.org

郵便振替 00180-3-1612451

